

日本浄土宗諸師の元曉引用章疏にみられる 若干の問題点

福 士 慈 稔

I 問題の所在

法然の『選択本願念仏集』に、浄土宗の宗名の根拠を「其證非一」として元曉遊心安樂道云、浄土宗意本爲凡夫兼爲聖人（大正蔵 83-1 下）

上のように元曉に仮託された『遊心安樂道』¹⁾を引き、更に「慈恩西方要決云、依此一宗、迦才浄土論云、此之一宗竊爲要路、其證如此不足、疑端」と続ける。しかし、この宗名の根拠の第一に「元曉遊心安樂道云」として引く「浄土宗意本爲凡夫兼爲聖人」という一文は、中国浄土教家の迦才『浄土論』に同じくみられる一文である。第一に迦才の『浄土論』ではなく『遊心安樂道』を引いたことにより、後の浄土宗諸師が『遊心安樂道』及び元曉の引用を引くようになるのであるが、本小論は、法然が何故に『遊心安樂道』の一文を引いたのか、法然の『遊心安樂道』引用と、法然以前の元曉認識の整理から考えようとするものである。

II 浄土系諸師に於ける元曉著述の引用

法然を始めとして浄土宗諸師の著述で元曉を引くものは

- 1 法然 (1133-1212) 1-『選択本願念仏集』
- 2 親鸞 (1173-1262) 1-『西方指南抄』
- 3 良忠 (1199-1287) 1-『選択伝弘決疑鈔』, 2-『観経疏伝通記』, 3-『観経疏略鈔』
4-『往生要集義記』, 5-『安樂集私記』, 6-『法事讃私記』
7-『般舟讃私記』, 8-『浄土宗要集』
- 4 道忠 (-1281) 1-『釈浄土群疑論探要記』
- 5 良心 (-1314) 1-『選択決疑鈔見聞』
- 6 了慧 (1251-1330) 1-『黒谷上人語燈録』, 2-『無量寿経鈔』,
3-『天台菩薩戒義疏見聞』, 4-『往生拾因私記』
5-『浄土論註拾遺抄』, 6-『選択集大綱抄』

- 7- 『新扶選択報恩集』
- 7 定慧（1296-1370） 1- 『浄土宗要集見聞』
- 8 光玄（1290-1373） 1- 『選択註解鈔』
- 9 聖岡（1341-1420） 1- 『伝通記糅鈔』, 2- 『決疑鈔直牒』, 3- 『浄土述聞口決鈔』
4- 『釈浄土二蔵義』, 5- 『二蔵義見聞』, 6- 『浄土略名目図』
7- 『浄土略名目図見聞』
- 10 良栄（1342-1428） 1- 『安樂集私記見聞』（作者疑問）, 2- 『浄土宗要集見聞』
- 11 聖聡（1366-1440） 1- 『大経直談要註記』, 2- 『小経直談要註記』
3- 『浄土三国仏祖伝集』
- 12 明秀（1403-87） 1- 『愚要鈔』
- 13 実慧（生歿年不詳） 1- 『摧邪興正集』
- 14 良定（1552-1639） 1- 『選択之伝』
- 15 忍激（1645-1711） 1- 『集成光明善導大師別伝纂註』
- 16 懷音（-1714） 1- 『諸家念仏集』
- 17 義山（1648-1717） 1- 『無量寿経随聞講録』, 2- 『阿弥陀経随聞講録』
3- 『円光大師行状画図翼賛』
- 18 加祐（-1661-） 1- 『法事讃私記私鈔』, 2- 『般舟讃私記私鈔』
- 19 信培（1675-1747） 1- 『阿毘達磨俱舍論指要鈔』, 2- 『成唯識論述記集成編』
- 20 顕慧（-1696-） 1- 『起信論義記幻虎録弁偽』
- 21 普寂（1707-81） 1- 『華嚴五教章衍秘鈔』, 2- 『成唯識論略疏』
- 22 義海（-1752-） 1- 『遊心安樂道私記』
- 23 妙瑞（-1787） 1- 『徹選択集私志記』, 2- 『鎮西名目問答奮迅鈔』
- 24 経歴（-1810） 1- 『識知浄土論私記』
- 25 撰者不明 1- 『法然上人伝記』, 2- 『大原談義選要鈔』
3- 『法事讃私記冠註』

概観しただけでも浄土真宗の親鸞の著述も含め 55 部挙げられる²⁾。引用する著述が多いのは良忠の 8 部、聖岡の 7 部、了慧の 7 部である。その中で良忠著述での引用回数は『往生要集義記』で 8 例、『安樂集私記』6 例、『法事讃私記』5 例、『観経疏伝通記』4 例、『浄土宗要集』4 例、『選択伝弘決疑鈔』3 例と他に抜きん出ている。三師以外では鳳潭の『起信論義記幻虎録』（日本大蔵経 43）に反論するため『遊心安樂道』や元曉の著述を 75 回程引用する顕慧の『起信論義記幻虎録弁偽』（日本大蔵経 43）を例外として、殆どが 1・2 回の引用である。

Ⅲ 法然の元曉引用とその影響

法然と諸師の元曉引用をみると、法然の元曉引用は次のように『選択本願念仏集』での2回だけの引用である。

1- 今號浄土宗有何證據也。答曰。浄土宗名其證非一。元曉遊心安樂道云。浄土宗意本爲凡夫兼爲聖人。又慈恩西方要決云。依此一宗。又迦才浄土論云。此之一宗竊爲要路(『選択本願念仏集』大正蔵 83-1 下)

2- 華嚴亦有菩提心。如彼菩提心義及遊心安樂道等説 (同 -15 中)

1 は先述のように、浄土宗の宗名の根拠に元曉に仮託された『遊心安樂道』の一文を引き、この一文に続き慈恩の『西方要決』と迦才の『浄土論』を挙げたものである。慈恩及び迦才の引用はこれ以外にもみられるが、宗名根拠の第一とする『遊心安樂道』からの引用はこの1例だけである。但し、各宗の菩提心に言及する中で2にみられるように華嚴宗で菩提心を説く著述として『菩提心義』(法蔵『華嚴発菩提心章』)と共に『遊心安樂道』が挙げていて、この一文から法然が元曉を華嚴宗の師として捉えていることが窺われる。

さて、宗名の根拠とされる『遊心安樂道』の一文は次の通りであり

又四十八大願。初先爲一切凡夫。後兼爲三乘聖人。故知浄土宗意。本爲凡夫。兼爲聖人也。又十解以去。不畏生惡道。故可願生浄土。故知浄土奥意。本爲凡夫。非爲菩薩也(『遊心安樂道』大正蔵 47-119 中)

次の迦才の『浄土論』と比すると、先述のように全くの同文であることが分かるのである。

復次法蔵比丘四十八大願。初先爲一切凡夫。後始兼爲三乘聖人。故知。浄土宗意。本爲凡夫。兼爲聖人也。復次如十解已上菩薩。留惑受生惡道。願救苦衆生。不生浄土。以任自業力更不墮惡道中故。即知凡夫由未勉惡道故。須生浄土中。十解已去。不畏生惡道故。不願生浄土也。故知。浄土興意。本爲凡夫。非爲菩薩也(『浄土論』大正蔵 47-90 下)

勿論、宗名の根拠となる『遊心安樂道』の一文と迦才『浄土論』のそれが同文であるということは、何も近年になって指摘されることではなく、『黒谷上人語燈録』を輯した了慧も『無量寿經抄』で

元曉云。四十八願初先爲一切凡夫。後兼爲三乘聖人。故知浄土宗意本爲凡夫兼爲聖人迦才亦同(『無量寿經抄』浄土宗全書 14-71 下)

と指摘しているところである。しかし、法然当時は迦才の伝が詳細ではなく、また元曉の生没年も詳細になったのは近年であるため、『遊心安樂道』が元曉に仮

託された書であるということも、『遊心安楽道』が『浄土論』を引用しているということも、法然以後の聖聰の『浄土三国仏祖伝集』の元曉→迦才という相承系譜が示すように³⁾、浄土宗では何等问题とされていなかったのである。

しかし、迦才の『浄土論』を精読していた筈の法然が、もし元曉の浄土関係の著述も精読したうえで『遊心安楽道』を手にしたのなら、法然としても自身の称名正因説と元曉の菩提心正因説という根本的立場の相違⁴⁾に気付く筈であり、立場が異なっていることを認識したままに『遊心安楽道』を宗名根拠の第一としたのであれば、法然が目したのは『遊心安楽道』の一文と共に、2で窺われるように元曉が華嚴宗の師であるという認識、他宗華嚴宗の元曉が「浄土宗意本爲凡夫兼爲聖人」と云っていること、とするのが自然であろう。それは、例えば親鸞が1256年から1257年に纏めた法然の言行録である『西方指南抄』では

浄土ノ法門ニオイテ宗ノ名ヲタツルコト、ハシメテマフスニアラス、ソノ證據コレオホシ、少少コレヲイタサハ、元曉ノ遊心安楽道ニ、浄土宗意本爲凡夫、兼爲聖人也トイヘル、ソノ證ナリ、カノ元曉ハ華嚴宗ノ祖師ナリ(大正蔵 83-850 上)

上のように1と2を合して、宗名の根拠と共に「カノ元曉ハ華嚴宗ノ祖師ナリ」として元曉に華嚴宗の「祖師」としての位を与え、それがそのまま慧輯の『黒谷上人語燈録』に次のように引かれることから考えられることである。

於浄土法門立宗名者、非吾之初唱之、其證是多、今爲初學出其少分、元曉遊心安楽云、浄土宗意本爲凡夫兼爲聖人、是其證也、彼元曉者華嚴宗祖師也

(『黒谷上人語燈録』大正蔵 83-139 下)

華嚴宗の「祖師」とする記載は、上記2書以外は玄光の『選択註解鈔』(浄土宗全書 8-475 下)にみられるだけである。ともかくも法然以後の諸師が元曉をどのように引いているのかを確認するため諸師の元曉引用著述を、①『遊心安楽道』を引き、宗名根拠とし、華嚴宗師元曉とする著述、②『遊心安楽道』を引き、宗名根拠とする著述、③『遊心安楽道』を引く著述、④華嚴宗師元曉とする著述、以上のように区分すると、

- ① 1-1 選択本願念仏集、2-1 西方指南抄、3-1 選択伝弘決疑鈔、6-1 黒谷上人語燈録、8-1 選択註解鈔、13-1 摧邪興正集、14-1 選択之伝
- ② 3-6 法事讃私記、6-2 無量寿経鈔、6-7 新扶選択報恩集、17-1 無量寿経随聞講録、24-3 法事讃私記冠註
- ③ 3-3 観経疏略鈔、3-8 浄土宗要集、4-1 釈浄土群疑論探要記、6-4 往生拾因私

記, 7-1 浄土宗要集見聞, 9-3 浄土述聞口決鈔, 9-4 釈浄土二藏義, 10-2 浄土宗要集見聞, 16-1 諸家念仏集, 20-1 起信論義記幻虎録弁偽, 24-2 大原談義選要鈔

④ 9-1 伝通記糅鈔, 12-1 愚要鈔

上にように①が7部, ②5部, ③11部, ④2部となる。全て合すると25部で、元曉を引く著述55部の半数近くが、法然が『選択本願念仏集』で『遊心安楽道』を宗名根拠の第一とした影響を承けていることが分かる。また元曉が華嚴宗師であるという認識に関しては、直接的に明記するものは①と④を合する9部であるが、実際には55部の殆どにその認識が感じられるのである。

IV 法然以前の元曉認識

法然没後の著述である華嚴宗の明恵(1173-1232)の『華嚴祖師絵伝』や『光明真言土砂勸信記』には「華嚴宗祖師」とする記述が登場し、それが親鸞や了慧の著述に示唆を与えたものと考えられるが、「華嚴宗祖師」という認識はともかくも、元曉を華嚴宗師とする認識は、後述するように法然以前に既に出来上がっていたのである。それも中国や朝鮮の僧伝類や章疏にはみられないため、日本で出来上がった認識のようである。

日本諸宗諸師の現存著述の中で元曉の著述及び名を引くものは多く、法然の時代まででも、筆者が知るだけではあるが、法相宗では善珠(723-97)から良算(-1202-)までの9師13部、華嚴宗では寿靈(-757-91-)から明恵(1173-1232)までの6師11部、三論宗では安澄(763-814)から珍海(1091-1152)までの7師9部、天台宗では最澄(767-822)から円琳(1174-)までの9師15部、真言宗では済遍(1025-1115)の3部、以上のように32師の51部の著述に引用がみられている。この中で、法相宗、三論宗、真言宗諸師の著述に元曉を華嚴宗師とする記載はみられない。

華嚴宗で最初期に元曉を引くのは寿靈で、法蔵の『華嚴五教章』解釈のための論拠として元曉の6部の著述を21回引いているが、特に元曉を「華嚴宗師」として明記するところはない。但し、失名の『華嚴宗所立五教十宗大意略抄』に華嚴宗の祖師として19人を挙げ、元曉も次のように挙げられている。

普賢菩薩 文殊菩薩 馬鳴菩薩 龍樹菩薩 堅恵菩薩 覺賢菩薩 日昭菩薩 杜順菩薩
智嚴菩薩 法藏菩薩 元曉菩薩 大賢菩薩 表貝菩薩 見登菩薩 良辨菩薩 實忠菩薩
世不喜菩薩 總道菩薩 道雄菩薩 (大正蔵 72-200 中)

多くの問題を有する著述で、また撰者及び撰述時が不明であるが、日本華嚴宗

第七祖の道雄（852）で終わっているため、少なくとも852年以後の著述である。これ以外の、特に寿靈以降の明恵までの諸師の著述には元曉引用は各数例しかみられず、また「華嚴宗師」とする記載はない。

現存著述で最初期に華嚴宗師とする記載がみられるのは天台宗の最澄の『依憑天台集』である。『依憑天台集』は、中国・新羅の多くの学匠が天台の宗義に依憑した事実を挙げた書である。元曉の引用も5例みられるが、その中に次のような記載がある。

1- 新羅國華嚴宗沙門元曉讀天台德證諸教時（伝教大師全集3-346）

2- 新羅國華嚴宗沙門元曉讀天台德證諸教時□其涅槃宗要末云、又如隋時天台智者、神人言、此土四宗、會經意不、神人答言、失多得少、又問、成實論師、立五時教、稱佛意不、神人答曰、少勝四宗、猶多過失、然天台智者、禪慧俱通、舉世所重、凡聖難測、是知佛意深遠無限、而欲以四宗科於經旨、亦判五時、限於佛意、是猶以螺酌海、用管闢天者耳、教迹淺深、略判如是（同-358）

1は目次にみられる題名である。2は1にみられる題名に続き天台讀の一文として元曉の『涅槃宗要』（大正蔵38-255下）を引いたものである。本書の特色と他の引用例（伝教大師全集3-351・353・357）をも併せ考えると、最澄が元曉を華嚴宗の師であるが天台の宗義に賛意を示している人物と捉え、論拠としていることが窺われる。この最澄の「新羅國華嚴宗沙門元曉」とする引用を承け、最澄に続く天台宗の蓮剛（815-80頃）・円珍（814-91）・安然（841頃-）の著述に次のように「華嚴宗元曉」とする記載がみられる。

1- 華嚴宗元曉師云、此土四宗、猶以螺酌海、成實五時、如用管闢天、天台智者、禪慧俱通、凡聖難測（蓮剛『定宗論』大正蔵74-319下）

2- 華嚴宗元曉法藏兩大德爲其高祖也（円珍『諸家教相同異集』同74-312中）

3- 華嚴宗元曉法師、亦立四教菩薩、三乘別教菩薩、三乘通教菩薩、一乘分教菩薩、一乘滿教菩薩、名目雖異、意同天台（安然『普通授菩薩戒成記』同74-763上中）

1は『涅槃宗要』または『依憑天台集』を参照しての一文、2は「此之八宗并其高祖是爲誰耶」という問い立てに答えたもの、3は諸師が引く元曉の四教判に独自に「菩薩」の語を附して挙げた一文である。これ等諸師の一文から9世紀の日本天台宗で元曉を華嚴宗の師とする認識が確立されていたと考えられる。

V 結語

最初期に『遊心安樂道』の引用がみられるのは11世紀の中頃の天台宗で、源隆国（1004-77）の『安養集』と失名『安養抄』である。叡山で修行した法然が『遊

心安楽道』を手にする機縁はあった筈である。ただ『安養集』では元暁の『無量寿経宗要』5例、『阿弥陀経疏』5例、『遊心安楽道』10例の引用⁵⁾、『安養抄』では『無量寿経宗要』1例、『阿弥陀経疏』7例、『遊心安楽道』5例の引用で、法然の2例のみの引用とは異なる。筆者は、この引用の少なさにこそ法然が『遊心安楽道』を宗名根拠の第一にする答えがあるものと考え、つまり、法然が元暁の浄土関係の著述全てを手にしていただか否かは問題ではない。日本天台宗で確立された元暁認識と、自宗の宗義に賛意を示したと他宗の師として挙げる最澄の手法を承けてこそ、立場の相違をみずに『遊心安楽道』を宗名根拠の第一としたと考えるのである。

法然が宗名根拠の第一に元暁に仮託された『遊心安楽道』を挙げた結果、後の浄土宗諸師が法然が手にしなかった元暁の著述をも引いて、根本的に立場が異なる法然と元暁の思想を会通しなければならなくなったのは指摘の通りである⁶⁾。

-
- 1) 『遊心安楽道』元暁仮託説に関しては既に日本では定説となっている感がある。示唆に富む論稿が多いが、特に章輝玉『「遊心安楽道」考』(『南都仏教』54, 1985年)と愛宕邦康『「遊心安楽道」の撰述者に関する一考察』(『南都仏教』70, 1994年)がそれまでの研究の問題点を整理して有益である。また近年では自説を更に進めた愛宕氏『「遊心安楽道」における光明真言の土砂加持の位置付け』(『種智院大学研究紀要』4, 2003年)がある。
 - 2) 拙著『新羅元暁研究』(大東出版, 2004年)では浄土宗諸師の元暁著述の引用を9師16部としたが、本発表では25師55部とする。今後も逐次明確にしていきたい。
 - 3) 愛宕邦康『「浄土三国仏祖伝集」における元暁の位置づけ』(『印度学仏教学研究』48-1, 1999年)
 - 4) 恵谷隆戒『新羅元暁の浄土教思想』(『浄土教の新研究』, 山喜房仏書林, 1976年), 源弘之『朝鮮浄土教の叡山浄土教に及ぼせる影響』(佐藤哲英『叡山浄土教の研究』, 百華苑, 1979年), 梯信暁『元暁の浄土思想について』(『日本・中国 仏教思想とその展開』, 山喜房仏書林, 1992年), 玉山成元『浄土宗における元暁の位置』(『東アジアと日本宗教・文学編』, 吉川弘文館, 1987年)
 - 5) 梯信暁『源隆国編『安養集』について』(『南都仏教』56, 1986年)
 - 6) 玉山成元氏前掲論稿。

〈キーワード〉 元暁, 遊心安楽道, 法然, 浄土宗

(身延山大学助教授)

teristics of Koguryō's pagodas is a problem. For example, what is the history of the one pagoda-three image hall pattern (一塔三金堂式) in the composition of Buddhist temple, and what the background of the the octagonal shape of the pagoda? In this paper I emphasize the fact that the cultural background of the characteristics of pagodas in Koguryō can be found in Koguryō's ancient tombs.

96. Several Problems of Quotations from Works of Wŏnhyo in Texts Written by the Jōdo Sect Masters in Japan

Jinin FUKUSHI

In his *Senchaku Hongan Nembutsushū*, Hōnen quoted a sentence 「浄土宗意本為凡夫兼為聖人」 from the *Yushin'anrakudo* for the most important reason that it establishes the Jōdo Sect's name. In the days of Hōnen, it was said that Wŏnhyo had written the *Yushin'anrakudo*, but actually this is not correct. By this, many masters from the Jōdo Sect wrote 55 writings, using quotations from Wŏnhyo. However, the sentence he used from the *Yushin'anrakudo* was also in the *Jingtu-lun* written by Jiakai. The question is, why did Hōnen quote the *Yushin'anrakudo* in the first place for the basis of the Sect's name? That is because Hōnen, who trained in ascetic practices in the Tendai Sect, was under the impression that Wŏnhyo belonged to the Kegon (Hwaōm) Sect, and also was swayed by Saichō mentioning Wŏnhyo giving approval to the teachings of the Tendai Sect. Hōnen only paid attention to the fact of Wŏnhyo saying 「浄土宗意本為凡夫兼為聖人」, not considering any difference between positions.

97. Nichiren's Writings

Masahiro KOBAYASHI

In this article, I aimed to detail a classic type of 'kana' which Nichiren used. By studying Nichiren's writing from the viewpoint of *hentaigana*, we can throw fresh light on problems of Nichiren's writings which have long